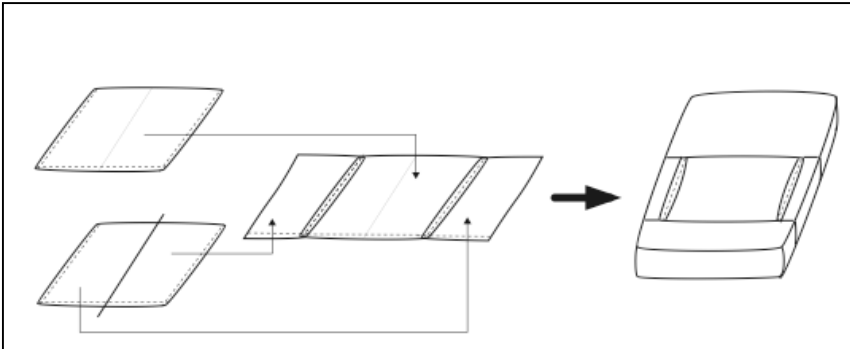


メリケン袋を廃品利用した横シート

No. 2

横シート



看護用品の解説

輸入の小麦粉を入れていた‘メリケン袋’を解いて横シートにして使った。このようなシートは看護学校にもあり、実習室で使った横シートは教員が縫っていた。病院では洗濯場の隣にあったリネン修繕室で作っていた。その部屋には専任の看護助手がいた。

看護用品にまつわるエピソード

メリケン袋を解く時にはコツがあり、綴じ始めの部分をうまく外すと引っ張るだけで最後まで外れたが、下手に外し始めると外すのに手間取った。袋は薄い黄土色で、表面には製品の表示が印刷されていたが、何度か洗濯を繰り返すと真っ白な布になった。袋を解いて作った布を2枚縫い合わせると中央に縫い目ができる。そのような横シートは体の下に縫い目がくるので患者に嫌がられたし、看護婦としても使うのは嫌だった。それで、両脇に縫い目がくるように縫われたものを使った。

(備瀬信子氏他，2004)

解説

布製のメリケン袋は、戦後の物資の乏しかった時期には、袋のままで入れ物として使われただけでなく、‘1948年にハワイから訪れた同郷の人からメリケン袋をもらい、それで通勤用のブラウスを縫った(友寄有紀子氏：琉球新報1998年10月11日「声」欄)’のように、服の材料など生活の中でさまざまな用途に使われていた。

直接患者の体に触れるリネン類にしわや縫い目が当たらないように、ベッドメイキングをすることは看護技術の基本である。廃品を利用してシートを作成する時に、縫い目が体の下にならないように布を縫い合わせていたことから、シートを使用する時の状態を予想して、できるだけ患者が不快にならないようにという観点から作成していたことがわかる。

(嘉手苺英子，2004)